
DRAW !

裕月照星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DRAW!

【Nコード】

N7506T

【作者名】

裕月照星

【あらすじ】

幼馴染で似た者同士な二人、陣内勝也と天坂奈々が織りなす決闘と葛藤の記録。

ありふれた高校生達の青春的一幕。

一言で言えば、ラブコメです。

自身のブログで載せていた奴を、こちらでも載せてみようと思いました。あれ、作文？

第1話

1 .

「……てめえ、もう一回言ってみろ」

「ああ、何度だって言ってやるよ」

市立○○学園高等学校の廊下に、緊張が走る。

そこでは、二人の男女が互いに額を寄せあい、痛烈なガンのくれ合いを演じていた。

片や、坊主寸前まで刈り上げた髪と頬に入った無数の傷跡が目を引き、ガタイの良い男。

片や、セミロングの黒髪と気の強そうな美しい美貌が目を引き、男ばりに身体の引きしまった女。

二人は今日の授業が終わるや否や、それぞれの教室から黙って立ち去り、廊下で出くわして以降、ずっとこの膠着状態である。

事情を知らない生徒たちは触らぬ神に祟りなしと言ったように、なるたけ素早く廊下を通り抜けようとし、事情を知る者は、巻き込まれない程度に距離を取り、しかし決して見逃さないよう、二人を注視していた。

「アリエツ。イの方が絶対に面白い！」

「かーっ！　ありえねえ！　前々からセンスの欠片もねえ女だとは思ってたが、ここまでたあな！　あんなヌル映画なんて見る気も起きねえ！　今映画つつたら“インセ。ション”だろ！」

「ちよつと、それ以上ジブリ馬鹿にするとファン代表としてあたしが殺すわよ！？」　つか、あんたにセンスどーこー言われたくないんですけど？　なんとかって言ったつけ？　あんなのアクションとCGの派手さだけじゃない！」

「そこがいいんじゃないか！ 映画なんて高尚な気持ちで見るもんじゃねえ、楽しみりやそれでいいんだよ！ 血沸き肉躍るような力ツケー映画！ それが全てなんだよ！」

「うつわキモツ！ つーか何その偏見！？ 宮崎映画に眠る数々の命題と、それを伝える素敵な世界観を理解できないなんて！ あーヤダヤダ！」

「あん！？ てめえがそんな事言うか？ 何気取っちゃってんのお前？ キメエんだけど」

「うつさいし、臭えし、きめえのはそっちの方なんだけどー」

「……」

「……」

二人は同時にガンの飛ばし合いを止め、額を離した。そして、示し合わせたように間合いを取る。

「アリ。ッティ」

「インセプ。ヨン」

女子の放った予備動作ナシの眼潰しを、男子は寸前で腕を掴んで防ぐ。

同時に、男子の放った本気のフックを、女子は腕の始点を手刀で抑えて封じる。

互いの攻撃が封じられたと見るや、二人はまたも同時に「ふん」と、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「ゆずる気は、無いってワケ？」

「たりめーだ」

「だったら、いつものやつで、“勝負”よ」

「ああ望むところだ！」

言って二人は、互いに右手に拳を作り、それを左手で包む。
それを大きく後ろに振りかぶり、そして、

「「じゃんけんポン！！！」」

解放した。

笑みを浮かべたのは、女子の方だった。

「ふふん、じゃ、あたしの先行でいいわね？」

「けっ……、だがまあいい。どっちから見たって、俺の方が面白いに決まってるからな」

一方男子の方は、じゃんけんに負けたショックで廊下に座り込みながら、不機嫌そうに言う。

単なるじゃんけんでも、負け惜しみがこぼれてしまうようだった。
しかし、再び立ち上がった時には、男子は再び闘志の炎を目に宿しながら女子を睨んだ。

「決まったならさっさと行くぞ。俺を後攻にした事を後悔させてやる！ てめえをド迫力の映像でイかせてやんよ！」

「ふん、あんたこそ、ジブリの感動でヒーヒー言わせてやるわよ！」

「けっ、やれるもんならやってみろ。んで、その後はカラオケに付き合ってもらうからな。こないだの10曲採点レースのリベンジを挑むぜ！」

「はん、あんたの超絶音痴を聞かされるのは不快だけど、まあいいわ。また地獄の絶望感を味わわせるのも気味がいいし。その代わり、その後はゲーセンでスト？のリベンジさせてもらうわよ！ 新技で叩きのめしてやるわ！」

「はっ、んなもん返り討ちにしてやるよ！」

「うっさいハーゲ！」

「黙れドブス！」

「単細胞！」

「性悪！」

「豚！」

「糞！」

互いに互いをのしりながら、二人は全く同じ歩調で、学校の昇降口に向かっていく。

その様子を教室から見届けていた一人の男子は、二人が行った後で、自分の机に戻る。

そして机の中から一冊のノートを取り出し、記入を始めた。

ノートの表紙には“カツヤ君×ナナさんのストロベリー報告書”と書かれていた。

「えーと、本日のおデートの予定は、映画鑑賞×2、徹カラ、ゲーセン……と。丸一日いちゃつく気まんまんじゃねえか」

まあ、傍から見たら、ただいがみ合ってるだけにしか、見えねえんだろうけどな。

と、ノートをまとめた男子はぼやいた。

「しっかしよくもまあ飽きもせず、毎日毎日やってるよなあ。他に友達いねーのかよ。あ、オレ友達じゃん。カツヤ君の」

男子はそうぼやくと、はぁーと溜め息を付いた。

片や、坊主寸前まで刈り上げた髪と頬に入った無数の傷跡が目を引き、ガタイの良い男。名前は、陣内勝也^{ジンナイ カツヤ}

片や、セミロングの黒髪と気の強そうな麗しい美貌が目を引き、男ばりに身体を引きしまった女。
アマサカ ナナ
名前は、天坂奈々。

この二人、幼なじみ同士である。

第2話

2 .

「なあ、お前天坂さんの事、どう思ってたんの？」

翌週の昼休み、自身の友人である新柴健二シンシバケンジに突然訊ねられ、勝也は顔をしかめた。

「はあ？ どうって、どういう意味だよ？」

「いやだっておかしいだろ！？ 何とも思ってたねえ男女が、フツー一緒に登下校したりデートしたりするか！？ 在り得たら羨まし過ぎるわっ！！」

「ちょ、待て待て。落ちつけ。何の話だ一体？」

デート？

俺と？

あいつが？

「バーカ。あれがデートに見えるのか？」

「見えるよ！ 男子と女子が手を取り合っ一緒に登下校する時点で、俺からすりゃデートと同じだ！ くっそおお！！」

自分から話題を振っておきながら、かってに勝也に嫉妬していた。新柴健二。友人ながら、めんどくさい男だ。

「あれがデートに見えろとか、お前の眼は節穴かよ？ 俺らの場合は手を取り合うつつーよか、取っ組み合うつて感じだぜ？」

それも、ガチで。

完膚なきまでに叩きのめしてやろうという気満々である。

「つか、何？ 俺らってそんな風に見られてんの？」

「何で意外そうな顔！？ 確かに知らない奴が見たらお前らの仲は最悪だよ！ 不良グループのトップとレディースのドンが運悪く同じ高校で鉢合わせたと思ひ込んでる奴らもいないじゃないさ！ けどな、俺らと同学年でそんな風に思ってる奴はほとんどいねえ！ 。高裏のツートップ恋仲説は、俺ら二年の間じゃとつくに定説になつてるよー！」

実際のところ、そこまでの共通認識は広まっていないが、それでも、休み時間のやり取りを好んで見てる奴らの大半は、そういう認識で二人を見ているだろう。

「……マジか？」

「……何そのすっぱー嫌そうな顔」

苦虫どころか、ゴキブリでも噛んでしまったかのような顔である。

「まったく、お前ら見る目無さ過ぎだつたの。あいつは俺のライバルで、要するに敵だぜ？ 小学校の頃からずっと、それ以上でもそれ以下でもねえ。つかそれ以下なんて無え。最低の関係なんだぜ？」
「いやだからそれは、お前ら独特のコミュニケーションなんだって
いう理解がだな——」

「それにさ、」

勝也の声のトーンが、急激に落ちた。

健二は息を詰めた。

そして、息を継げなくなる。

睨まれたのである。

底なしの、漆黒の双眸が細められ、眉間に深い険が刻まれる。

勝也にガンを飛ばされて平気でいられる奴など、おそらくこの学校に、たった一人しかいない。

「お前、確か俺とは中学からのダチだよな？」

「あ、ああ……！」

「だったら、知ってたんだろ？　俺が、そういうの無理だって事」
「……………」

勝也が似合いもしない溜め息を吐いて目を背けるまで、健二は呼吸もできなかった。

そして勝也は、持っていたパンをまた食べ始めた。

「ってことで、この話はシメーだ。次こんな話振ってきやがったら
歯折るからな」

「うわ！　リアルにやりそうで怖っ！！」

そうやって、おどけるのが精一杯だった。

第3話

3 .

その日の放課後、勝也は正門の門扉によりかかり、仏頂面で突っ立っていた。

腕組みをしながら、ずっと校舎の方を睨んでいる。

彼を知らない無垢な後輩達を（無自覚に）ビビらせながら、勝也は一人の女を待っていた。

そして、そろそろ日が暮れようという頃に、

「よ、よう」

その女はやってきた。

言わずもがな、天坂奈々である。

「おう、遅かったな。ったく、早くこつち来い！ 今日に通学路Bで障害物レースだろーが！」

「あ、ああ、分かってる。分かってるんだけど……」

奈々の煮え切らない物言いに、勝也は首をかしげた。

どうも、様子がおかしい。

口調もそうだが、視線が泳ぎがちである。手も足も微妙に揺れていて落ち着きが無い。

何か、迷いのようなものを持っているようだった。

（演技……か？）

油断させ、自分を出し抜くための演技をしているという可能性もあるにはあった。

しかし、あいつがここまで高度な演技の出来る奴ではない事は知っている。

自分の知っている奈々なら、こいつの今の挙動不審は演技ではない。

しかし演技じゃないなら、目の前にいる奈々は、別人と言っても

良かった。

「んだよ？ 何きよどつてんだよ気色悪い」

「う、うっさいわね！ き、今日は、気分が乗らないから、普通に帰りたいだけよ！」

やはり、様子がおかしい。

普通に帰りたい？

通学路をコースに見立てた、妨害障害何でもアリアリの鉄人レースしながら帰るなんて、それこそ俺らの“普通”ではないか。

奈々は依然、勝也と目を合わせようとしないまま、校門をくぐろうとする。

当然、勝也はそのまま通すつもりなど、無い。

「何だそれ、敵前逃亡かよ？ お前らしくもねー」

目の前に立ちはだかった勝也は、真っ直ぐに奈々を見下す。

その言葉に流石にカチンと来たのか、奈々も眼光を鋭くする。

「勝手に“あたしらしさ”とか決めつけてんじゃねーよ。カス」

トーンの低い、ドスの効いた台詞。

「はぁ……」

奈々も一言言い放ったおかげで若干殺意は回復したものの、それでもまだ、気分が上がらなかったらしい。

勝也と同じくらい似合わない溜め息を吐きながら、奈々はうつむく。

「いや、今日……イヤな話、聞いてさ。それも、途轍もなく、反吐が出るくらい嫌な話でさ」

「あ？ 話？」

「なんか……あたしと、あんたが、出来てるとか出来てないとかって、そういう……」

「ん？ ああ、何だ、噂の事か。俺も今日、ダチからそんな話聞いたぜ？」

奈々は驚いたように顔を上げた。

目の前にいる、幼なじみにして宿敵であるその男は、不敵に笑っ

ていた。

10年間、変わらない笑みだ。

奈々が10年間、見続けた笑顔だ。

「あんなもん放つとけや。あんなもん同年のバカ共のバカ共によるバカバカしい妄想だろ？　ったくよーどいつもこいつもやれ惚れたの腫れたのウゼーつつの。なあ？」

お気楽に言う勝也とは対照的に、気だるげに勝也を見やる奈々。

「あんたさあ……」

奈々は何かを言いかけて、止めた。

一瞬握った拳を、だらりと解く。

そして奈々も、不敵に笑う。

ただし、より倦怠感の漂う、危うい笑顔であったが。

「さっきの言葉、取り消すわ。いつものレース、やろうか」

「……んだよ？　何か言いかけたじゃねえか。言いたい事あんならはつきり言えや」

「いーのよ。どーせくつだらねー事なんだから。合図は、いつものでいい？」

「あ、ああ。ったくワケ分かんねー女だ——」

「位置についてヨーイドンっ——！」

一瞬。

一瞬で勝也の脇をすり抜け、奈々は校門を飛び出していった。

虚を突かれた勝也は、しかし即座に何をされたか判断し、自分も一気にスタートを切った。

「オイ！　てめそれヒキヨーだろ！　待てコラァ！」

全力疾走しながら叫ぶ勝也の声に反応して、5メートル程先を行く奈々は、背後を振り返った。

その表情は、さっきまでのような危うさの無い、笑顔。

屈託の無い、花が咲くような笑顔だった。

「うつせえバーカ！ あんたが全部悪いんだよボケが！！」

「んだコラア！ それどーいう意味だコラア！！」

勝也は混乱しながら、心のどこかで安心していた。

やはり目の前にいるのは、本物の奈々である事。

自分が昔からよく知る、奈々そのものである事に。

第4話

4 .

「……あれ？」

「おう、気が付いたかよ」

奈々は目覚めると、自室のベッドに横たわっていた。

傍らには、机に置いてある物を見分している勝也がいる。

室内に明かりは付いておらず、外はそろそろ日暮れのように、オレンジ色の光だけが室内に差しこんでいた。

そこまで現状を把握して、奈々は自分に起こった事もついでに思い出す。

身体を起こした奈々は、髪をくしゃくしゃにしながらつぶやく。

「そっか、あたし、こけたんだっけ」

「ああ。そりやもう無様にな。しかも頭打って白目向いてたからな。ブツサイクな顔してやがったな」

「うつさい。白目向いてもイケメンな奴なんていないわよ」

ともかく、頭を強く打って気を失った奈々は、勝也によって運ばれ、今ここにいるという訳だ。

「つーか、何レディの部屋をジロジロ見てんのよ。変態」

「あ？ 何を今さら。ガキン頃はよくここで決闘してただろ？」

「そりや、そうだけど……」

「相つ変わらず、趣味の部屋だよな。何だよあの壁のポスター？」

「うつせえ見んな」

「何言つてんだ。あんなデカデカと貼られて、“見て下さい”って言ってるようなもんじゃねえか」

「あんたに見て欲しい訳じゃねーよ！ あーもうつー！！」

奈々はのけ反るように両手を振り上げ、そのまま両方の拳をベッドに叩きつけた。

そして顔を掛け布団に押し付けながら、呻いた。

「最低……」

今日は本当に、最低だった。

友人との他愛ない雑談から何だか落ち着かなくなって、勝也の前で弱みを見せてしまって、終いにはレース中、こいつが何もしないのにつっこけて、頭打って、あまつさえ、こいつに部屋まで運ばれる始末……。

（なにやってんだ、あたし……）

「……悪かったわね」

「あ？ 何だつて？」

勝也は本棚を物色していて、何を言われたか分からなかったらしい。

普段ならここでキレて舌戦の火蓋とするとところだが、奈々は繰り返して、言った。

「運んでくれて悪かったわねって言ったのよ」

「は？ 別に？ ……何だよ。やけに殊勝じゃねえか」

「……そうね。今日のあたしは、何か変なのよね」

最早、勝也の台詞の上げ足を取る気力も無い。

奈々はそのままベッドに倒れ込んだ。

太陽が沈み、室内は段々と暗くなる。

若い男女が同じ部屋にいて、ベッドがあつて、邪魔者は何もない。なのに、その手の危ない気配は全く無い。

まあ、当然だ。

勝也にとって、奈々は女では無い。

好敵手。宿敵。人生における最大のライバルであり、幼なじみ。何の好敵手で、何の宿敵で、何のライバルなのか、もう忘れてしまったけれど、幼なじみ。

その関係のまま、これまで、数々の戦いを繰り広げてきたのだ。いつ決着がつくかも分からず、いつ果てるとも分からない戦いを、10年も。

だから、勝也は奈々を、襲ったりはしない。

そんな形で全てを終わらせる事なんて望んでないから。

望んでいるのは、きつちりと、しっかりと、シロクロはつきり付くような、決着。

あるいは、これから永遠に、敵同士として、相對する事。多分、そうなのだろう。

(こんなになるまで、付き合ってきたあたしもあたしだけど……)

奈々は寝返りを打ってうつ伏せになる。

今頃になって、と言うか、今日になって、気づかされた事がある。あるいは、思い出した事がある。

そして、色褪せてしまった、思いがある。

枕に顔を埋め、闇の中に去来するのは、過ぎ去った過去と、今日の出来事。

勝也にとって、奈々は女ではない。

では、奈々にとって、勝也は何なのか……。

「勝負……、しばらく止めとくか」

「えっ？」

枕から顔を上げた奈々の視界の先で、勝也は壁のポスターを眺め

ていた。

ポケットに手をつ込み、だらけた立ち姿のまま、勝也は、奈々をちらとも見ずに言う。

「いや、お前頭打ったし、しばらく休んどけよ。本調子じゃねえ奴を潰しても、嬉しくも何ともねえ」

それに、と、右手をポケットから取り出し、頭をボリボリと掻きながら、続ける。

「今のお前じゃ、絶対に俺に勝てねえもん。だから、一時休戦」

その言葉は普通、いがみ合っていた者同士が歩み寄り、一時的とは言え争いを止める、奇跡的な時間の事だ。

なのに奈々はその言葉に、言い知れぬ不安を感じた。

歩み寄るところか、このまま疎遠になってしまいそうな、不安感。

「……何それ？ 武士の情け？」

「まあそんなトコだ。勝負は、まだ付いてねえからな」

勝也は、もう喋らなかった。

奈々が何か言うのを待つように、ただぼーっとポスターを見るだけである。

「……もう寝る。帰れ」

そう言うつと、勝也は黙ったまま、素直に部屋を出ていった。

第5話

5 .

翌日。

“いつも通りに”学校へ行こうとして、勝也は斜向かいの家に住む奈々を待っていた。

が、しばらく経っても奈々は現れず、どうしたのかと思案を巡らせて、昨日自分が“休戦宣言”をした事を思い出した。

「ちっ」

舌打ちを漏らし、仕方が無いからそのまま一人で登校しようと歩き出したところで、

「あ、あの……」

見知らぬ女子が話しかけてきた。

「あ、あの、あのあの……陣内、カツヤさん……ですか？」

制服を着ていなければ小学生かと思う程小柄で、顔の作りも小さく幼い感じ。

その中で眼だけが大きく見えるのは、掛けてる眼鏡の度が強いからだろうか。

髪はショートで、一見すれば男の子に見えなくも無いが、やはり制服からして、性別は女だろう。

そんな感じの、気弱そうな女子が、顔面傷だらけ、坊主寸前の髪型をした目つきの悪い不良男子に声をかけてくるというのは、おそらくタダ事ではない。

しかもこの女子、違うクラスのはずなのに、勝也のフルネームを知っている。

「ん？ ああそうだけど、お前誰？」

勝也は若干の警戒をしながら、女子に訊ねた。
不機嫌そうなその物言いに、女子は気の毒に全身を震わせたが、それでも何とか顔を上げて、自己紹介を始めた。

「え、えつと、わ、私、ナナちゃんの、友達で、カノウ ユイ叶野結と言います」

緊張しているのか、たどたどしい口調で名乗った、結と言っらしい女子。

しばらく奈々以外の女子と話していなかった勝也は、久しぶりに触れる“女の子らしさ”という奴に、自然と頬がゆるむ。

「へー！ あいつにこんな友達いたんだ。しかもこんな可愛い子ちゃん……」

「はわっ！ ！？」

そして、勝也がポロっと言ってしまった正直な感想を聞いて、結の様子が激変した。

おどおどしながらも、初対面の人に対する最低限の礼節だけは弁えていた結が、突然勝也を突き飛ばしたのである。

そしてそのまま耳を塞いで勝也に背を向けて駆け出し、すぐにその場にうずくまってしまった。

「い、いえいえ止めてください！　そういうおべっかとか、ホント嫌なんです！　もう聞き飽きてるんですよそういう気遣いっばいお世辞は！　わ、私なんか、そうじゃないんです！　ホント勘弁して下さいいいいい！！」

「あ、あの……叶野さん？」

「いやもう止めて下さい！　ほつとして下さい！　私、陣内さんを変態みたいに言いたくないんです！」

「……………！！」

衝撃だった。

いや、結の突き飛ばしの威力は一般女子のそれで、勝也がそれで物理的ダメージを負う事など無かったが、

これは精神的に、くるものがあつた。

聞き飽きてるらしい。

まあ、確かに実際可愛いから、よく言われるのかもしれないが。しかしその可愛さを、当人が全く自覚していないようだった。

と言うかこの過剰反応は、もはや人間不信と言つていいかもしれない。

朝っぱらから、随分と濃いキャラと話してしまった。

勝也は結をフォローする手立ても思い浮かばず、途方に暮れた。

「あつ、違う違う！　今日はこんな事言つつもりじゃ無かつたんだ！　何やってんの私！　はう、ごめんなさいいい」

「……………！！」

自分で自分を叱って、自分で自分に謝る女子を見てしまった。
勝也は、これまでの人生でも、そしてこれから、こんな気持ちを抱く事など決して無いと思っていたが、それは違った。

逃げてえ。

超逃げてえ！！

勝也は、自分も正常な人間である事を実感した。

「はっ！ す、すみませんでした！ お見苦しいところをお見せしてしまつて……」

「えっ、あ、いや、どうも、こちらこそすみませんでした……」

シヨックのあまり、勝也、激レアの丁寧口調である。

そうして一しきり謝り合つて、ようやく結も混乱から復活したようである。

「えっと……それで、今日は、陣内さんに、その、お話があつて……」

「えっ、俺に用なの？ あいつにじゃなくて？」

思わず訊ね、自分の後方、奈々の家を指差した勝也。

普通に意外に思う気持ちもあったが、それより、自分がこれ以上この娘と関わり合いたくないという深層心理の表れでもあった。

そんな勝也のさり気ない拒絶意思の方には反応しなかった結は、素直にコクンと頷く。

「はい。あの……ナナちゃん、昨日は、どんな様子でした？」

昨日。

「……あーそーいやいつもと様子が変だったな。ズルはするしコケるしよー」

勝也は苦々しい顔で、吐き捨てるように言った。
その言い方に、結も表情を曇らせた。

「すみません。たぶん、その原因、私、だと思っんです」

「ん？ お前の？」

「実は、昨日ナナちゃんに、ちょっと、イヤな事、聞いちゃったんです」

「……イヤな事？」

イヤな話を聞いた。

そう言えば、昨日も奈々はそんな事を言っていた。

「はい。『ナナちゃんは勝也さんの事、好きなの？』って」

「……！！」

そんな話は、自分も聞いたはずだった。

「それで私、全然答えてくれないナナちゃんに、勢い余って、言っちゃったんです」

勝也を、衝撃の波状攻撃が襲ってきた。

「『もし私が陣内さんに告白したら、ナナちゃんはどう思うっ?』って」

「……っ!!?」

この女、めちゃくちゃだ!

勝也はその衝撃をともに防ぐ事も出来ず、打ちのめされた。

結は今、震えていなかった。

静かな、真っ直ぐな眼で、勝也を見つめていた。

「少し、歩きながら話しませんか? 私、勝也さんの事、知りたいです」

その眼を見て、勝也は、考えた。
そして、覚悟したようだった。

第6話

6 .

「……俺さあ、父親、いないんだよ」

「えっ？」

藪から棒に発せられた勝也の発言に、結はビクつとしながら隣を向いた。

勝也は結の方を向かず、ただ前を見ていた。

「いや、俺の事知りたいつつたろ、お前？」

「い、言いました。けど……なんと言うか、あっさり、すごい事言っちゃったから……」

「別に。ここまでの道中で、とりあえずお前が良い奴だって分かったから、言っただけだ」

ちなみに、告白云々は、結が奈々に答えを迫るために、本当に勢いだけで言ってしまった事らしく、勝也に気があるとか、そういう事は全く無いらしい。

むしろ、結には今好きな奴が他にいるのだと言う。

まあそれはそれとして、結は純粋に、奈々の事を思って、勝也に会いに来たという訳だ。

自分の発言のせいで、奈々と勝也の関係が崩れてしまうのではないかと気に病み、また、いつも奈々と一緒にいる勝也がどんな人物

なのかも気になり、居てもたつてもいられなかったのだと言う。

行動や言動に少々（と言うかかなり）行き過ぎた所はあるが、一応、彼女の言葉を真実であり、真心だと認めた勝也は、結の希望に答える事にした訳だ。

つまり結が知りたがっている、自身の事について。

ついでに、自分で確認するという意味も込めて。

「ガキの頃さ、親父とお袋が大ゲンカしてよ。理由はよく分かんなかったけど、互いにすっげーのしり合ってたよ。結局離婚して、俺はお袋に引き取られた」

「ご両親が……」

「まあ、世間様じゃよくある話だけだな。けどそんな時や俺もガキで、世間つてもんを知らなかったからよ。どうしても……な」

それを理由だと言い張るつもりは無い。

親に責任を押し付ける気は無い。

ただ、やっぱり理由の一つでは、あるのかもしれない。

勝也が、惚れたの腫れたの、恋愛感情というものが理解できないのは。

カルマ、と言うのか。

少なくとも、ルーツではあるのだろう。

「ま、今は別に気にしてないんだけどな。お袋は女手一つで俺を食わせてくれたし、ま、働きに出てたから会えんの週一ぐらいだったけどな」

「寂しく……なかったんですか？」

結が、恐る恐るといった感じで、聞いてくる。

勝也はその問いに「ん？」と少し黙考して、答えた。

「そーいや、あんま寂しいとは思わなかったな。何故か知らんが……」

勝也は首をかしげるが、結には想像がついていた。

(……本当に、気づいていないんだろうか?)

そんな事も思っ、結は勝也に訊いた。

「あの、ナナちゃんとの馴れ初めは、どういうものだったんですか？」

勝也は“馴れ初め”という言い回しに少し渋い顔をしたが、「まあいいや」と流して、話し始める。

「あいつと会ったのは、小学校入ってすぐだったかな？ 俺がまだ純粹無垢で穢れの無かった頃の話だ」

「なるほど。その頃はいい子さんだったんですね」

「……真に受けんな。冗談だよ」

しかも、今の勝也の事は、毛ほどもいい子だとは認識していないという事まで分かってしまった。

恐るべし、天然。

閑話休題。

「まあとにかく、友達作ってわいわいやる気満々だった俺の前でな、ある日一人の女子が廊下で転んじまってたんだよ」

同じクラスの子だと記憶していたので、当時の勝也は何の気無しにその子に近寄り、『大丈夫か?』と声をかけた。

「そしたらそいつ、いきなり『寄るな触るな近づくな』の三連コンボだよ」

「ふふ、その子が、ナナちゃんですね?」

「まあな。で、俺は当時、純粹無垢で穢れを知らないアンファントリブルだったからよ。そういう言い方にすぐカチンと来てな。嫌がらせに、寄って触って近づいてやったんだ」

「……典型的ないじめっ子じゃないですかそれ」

いい子だつて言つてたのに、と、何故か頬を膨らませる結だから、真に受けるなと言つたろうに。

「まあとにかく。それで、当然あいつはあだから、暴力に訴えやがつてよ。まああれが、俺らの闘争の第1ラウンドだったな」

第1ラウンド。

勝也は、ボロボロに負けた。

頬の傷の一つは、その時のものだ。

「あいつ、思い切り爪立てやがつてよ。これが頬じゃなくて眼だったら失明確定だったな」

「うわぁ、想像できちゃいますね……」

「だろ？ それからしばらくは、リベンジ、やり返しの繰り返しだったな」

第2ラウンド。

根に持っていた勝也が奈々を奇襲し、保健室送りに（勝也は職員室送り）。

第3ラウンド。

根に持っていた奈々が勝也を階段から落とし、これまた保健室送りに（奈々は巧妙に罪を逃れ、無傷）。

第4、第5、第6ラウンドと、先生の介入も無視して、親の説教にも耐え忍び、幾度も幾度も、相手を貶め、陥れてきた。

「んでまぁ、そっからだな。俺らの日々が始まったのは」

そうして勝也は、学校に着くまでの道中、結にこれまでの戦いの数々を語ってみせた。

小1の頃の無秩序な殺し合いに始まり、

小2、他人を巻き込まず、フェアに戦う事を定めた“決闘協定”を結ぶ。

小3、初めて、肉弾戦の喧嘩以外で勝負をし、以後、日常全ての事柄を“勝負”に置き換えるようになる。

小4、社会科見学の行き先で大々的に行ったサバイバルゲーム。

小5、奈々の策略により退学寸前まで追い込まれるも、自力で復活。

小6、修学旅行先の女部屋に侵入。当然、ガチの枕投げ対決をするため。

中1、テストの点が張り出されるようになり、学業でも闘争心を燃やすようになる。

中2、奈々が合気道の黒帯を取得。しかし勝也（空手黒帯）との私闘に使ったために破門される。

中3、卒業式の後、最低教師を焼き討ちするため、最初で最後の共同戦線を敷く。

そして、高1、高2……

勝也の語る戦いの系譜。

そこに登場する奈々は、結の知らない面を持ち合わせていながら、それでも確かに、奈々だった。

不機嫌で、闘志むき出しで、ガサツで、雄々しくて、強くて、勝也の前では、決して弱みを見せない、戦士としての奈々。そんな奈々の強さも弱さも、勝也は全て分かっていた。

何故なら、ずっと戦ってきたから。

ずっと本気で、ぶつかり合ってきたから。

勝つために、奈々の性格も、癖も、弱点も、全て分析してきたから。

そんな、他の誰も、介入する余地の無い絆が、二人の間には存在する。

悪口や皮肉たっぷりに過去の奈々をバカにする勝也を、その楽しい表情を見ながら、結は思う。

私は、本当に余計な事をしたのだ、と。

「ん？ おっと。いつの間にか学校付いちまったな。歩いてても案外近けーもんだな」

勝也のこの発言に、結は思わず吹き出してしまった。
実際は、徒歩で30分はかかっている。

とつくに始業ベルは鳴り終わっているのだ。

しかし勝也は腕時計もしておらず、携帯も開いていないので、その事実には気付かない。

せいぜい他の登校生徒がいない事を、不審に思っている程度だ。
時間も忘れて、夢中で話していた。

これまでの戦歴を。そして、奈々の事を……。

「やっぱり、思った通りでした」

結は、未だに違和感の正体に気づいていない勝也に、一方的に言
った。

「勝也さんは本当に、ナナちゃんの事が大好きなんですね！」

花が咲くような笑顔と共にそう言つと、結は会釈して、そのまま
校舎の方へ駆け出していった。

「……あ？」

間抜けにも取り残された勝也は、言われた事が理解できず、ボー
っと突っ立ったまま頭を掻いた。

第7話

7 .

その日の授業中、
勝也には終始、覇気が無かった。

いつもなら周囲の人間が泡を吹いて倒れる程の気迫を垂れ流している癖に、だ。

今日は先生の話も聞かず、ノートも取らず、自主勉も内職もせず、ただただ、机に突っ伏して眠っていた。

何もやる気が起きない。

“戦闘”が一時休戦になっただけでこの体たらくである。

「うつわ、相当重症だなこりゃ」

放課後。

皆が帰り支度をする中、ピクリともしない勝也の席に、健二が近寄ってきた。

「あーあーこんなに落ち込んであってまあ、そんなに天坂が心配ならちよつくら隣の教室に様子見に行きやいーじゃん。オレもそつちにツテあるし」

返事が無い。

ただのしかばねのようだ。

「やれやれ、見るに堪えねえな。確かにリア充は疎ましかったけどな、こんな抜けがら見させられるぐらいならいっそ幸せになっ

しいもんだよ。もちろんオレの見えない場所で」

「……うるせえな。お前にや関係ねえだろ？」

返事があつた。

が、ただのゾンビのようだ。

生ける屍。

特に今の勝也には、その表現はピッタリと当てはまつた。

「……つか、リア充とか、そういう話振るなつて、昨日忠告したはずだよなあ」

のろのろと頭を上げ、虚ろな目で健二を睨む勝也は拳を振り上げようとして、しかしすぐ力無くその腕を垂らした。

「……まあいいか。大人げねえし」

そして、そのまま頭も机に預け、更にだらけた姿勢になる。

新柴健二は、動揺すると同時に、分析する。

昨日の奈々の変化も、今日の遅刻の原因も“既に聞いている”とは言え、このダウンーぶりは、それだけで説明出来るものでは無かつた。

（何か……あつたのか？）

勝也は今日、授業を聞かず、自主勉もせず、自主トレもせず、動かず、教室からも出ず、そして、休み時間の恒例行事である、奈々との睨みあいも、していない。

奈々の方も奈々の方で、勝也に会いに来ようとしなない。

これはもう、異常事態だった。

（あるいは、変化の兆しかな？）

おそらく、二人の関係は、自分の想像以上に進展している。
互いに別々の過程を経て、相手へ抱く感情に、変化が生じてきて
いるのだ。

しかし、それをお互い、認めようとしていない。

“気づき”の段階は、もう終わっただろう。

あとは、踏み切らせるだけ。

（……つか、何でオレは、ガチで二人をくつつけようとしてんだ？）

恋バナを勝也に振った理由はそれとしてあるが、
それとは別に、“本心から”二人をくつつけたいと思っている自
分がいる。

そのことを、健二は今さら意外に思った。

勝也の言うとおり、二人の関係がどうなるかなんて、健二には直
接関係ない。

そんなことは、二人に任せておけばいいのだ。

仮に喧嘩別れになったとしても、それはそれでいいではないか。

この二人の事だ。

ちゃんと、納得のいく別れ方をするだろう。

下手に二人に介入して、恋仲にさせる必要性なんて、どこにも無
い。

（……けどま、必然性は、あるのかな）

ずっと一緒だった。

ずっと寄り添ってきた二人が、恋人どころか敵同士。

それが事実だろうと、言葉の上側だけだろうと、そんな関係は、はつきり言って気持ち悪い。

違和感ありまくりである。

だから、この二人と深く関わってしまった健二は、違和感を正しなくてはならない。

勝也と奈々にはとつととくっ付いてもらって、思い切り「リア充爆発しろ」と罵りたいのだ。

モテない男子代表として、友人代表として、二人の関係をひがみたい。

だからこそ、新柴健二は、叶野結からのめちやくちな依頼を、引き受けようと思ったのかもしれない。

（結ちゃんも、思った事は同じって訳か）

二人の問題だからと言って、関係ないで済ませたくない友達が、お前らには、いるのだ。

それを、ひとまずこのバカに、教えてやらねばなるまい。

（……よし）

健二はまず、死ぬ覚悟をした。

仮に勝也をキレさせ、こいつに殺されてしまった時に、美しい走馬灯が見れるように。

未だ沈黙し、顔を上げない勝也に、健二は攻撃を開始した。

「なるほど？ どうあっても認めねえ訳か」

「……だから」

くぐもった低い声が、伏せた顔と腕の間から洩れる。

恐ろしく怖いが、健二は踏みとどまる。

「あいつとはそーいうんじゃないよ。それに、俺は恋とかそういうの……」

「分かんねーってか？ 普通そうだろ？」

「……何？」

勝也はピクリと反応し、健二もニヤリと口元を歪める。
即興で思いついた台詞だが、これはいけそうだった。

「恋だの愛だの、それが一体何なのかなんて、誰も分かつちやいねーんだよ。オレだって分かんねーし、天坂だって分かつてねーよ。この世の誰も、そんなもん本当に理解なんてしてねえんだよ」

だってそんなもん、影も形もねーじゃねえか。

目で見えないし、触れもしない。
誰にも捉える事なんて出来ない。

健二は、ごくごく当たり前の事を言った。

「分かるか？ お前だけじゃねーんだ。お前はただ、自分の過去だの根っこだのを言い訳に、逃げてるだけなんだよ！」

「……何だと？」

「勝也が顔を持ち上げ、ガンを飛ばして来た。
全然恐ろしくなかった。」

今、健二は最強の武器を持っていたから。
偶然手に入れた、この世で最も正しい言葉があるから。

「お前だつて、うすうす気づいてんだろ？ 自分の気持ち」

目に見えず、触れもしない。

ふわふわしていて、捕えがたいもの。

それでも甘く、芳しい香りがして、身体と心を、温かくするもの。
そんな気持ちを、奈々に対して抱いているなら、それはもう、恋
じゃないのか？

健二は一旦、喋るのを止めた。

そして、勝也の言葉を待つ。

「……分かんねえんだよ」

返ってきた言葉は、今までと変わらない、逃げの言葉などでは無
かった。

続く言葉と、震える拳が、それを物語っていた。

「分かんねえんだ。あいつが、何考えてんのか。俺はあいつとずつ
と、ずっと戦ってきて、競い合ってきた。時には正々堂々、時には
姑息な手を使って、本気の殴り合いもしたし、本気の嫌がらせもし
た」

あいつの事で知らない事なんて無かった！

勝也はいつの間にか、目に涙を溜めて、叫んでいた。

「昨日までは……か？」

「あいつさ。昨日ずっとこけて氣い失ったんだよ。んで、あいつ、俺におぶわれてる時によ、泣いたんだ」

勝也が、ぎり、と、齒を食いしばった。

そして一呼吸置いて、認めがたい事実を白状するように、言った。

「勝也……ってよ。俺の名前を呼んで、泣いたんだよ。意識も無かったはずなのに」

近頃は、お前、とか、あんた、とか、二人称でしか呼び合っていなかったのに、だ。

「あの声聞いてからよ、なんか色々、ワケ分かんなくなつてよ……、休戦とか言つて、あいつに、ワケ分かんねー情けなんてかけてよ……。ワケ分かんねー……」

何度も、何度も、ワケ分かんねーを繰り返す勝也。
もうひと押しだろう。

健二は、訊いた。

「で、お前はどう思った？」

「……どうって」

「天坂に名前で呼ばれて、背中であかされて、それをどう感じたんだ

？ 最初に沸いた感情は何だ？」

ここだ。

ここで、全てが決まる。

勝也がどんな言葉を吐くか。

それで、二人の全てが分かる。

そして勝也は、つぶやいた。

「……ムカついたよ」

第8話

8 .

「よう。遅かったな」

勝也が校舎を出ると、門で奈々が待っていた。
丁度、昨日と逆の構図である。
少し戸惑ったが、表には出さず、自然な感じで挨拶を返した。

「おう。頭大丈夫か？」

「おい、ドタマからそれが。どういう意味だコラ」

「いや、お前昨日コケたろ」

「……普通の意味だよ。言い方考えろつての。まあ、一応大丈夫だと言っておくわ」

「つか、お前学校来てたんだな。待つても全然出て来なかったからよ」

「バーカ。それはあんたが“勝負”する前提で家出たからでしょ？
その時間から徒歩じゃ間に合わないから、あたしは十分早く出たのよ」

「はっ！？マジかよ！？」

「ふん、思うところが無いじゃなかったけど、その程度で混乱する

程ヤワじゃないし、遅刻するほど不良じゃないのよ。あんたと違ってね」

「ばっ！ おめえあれはだな、登校途中でカワイー同級生に話しかけられてウハウハやってたら遅れたんだよ！ どうだ羨ましいだら？」

「ユイちゃんの事でしょ？ 知ってるわよバカ。あ、そうだ」

と、いかにも何か思いだしたように言う奈々。

「その結ちゃんの事だけどね、あんたに一つ、言っとなきゃいけない事があるのよ」

「何だよ？」

「ユイちゃんと、あんたのダチの、なんだっけ、新木場？」

「新柴だ」

「そう、その新柴と、グルだったらしいんだよ」

「はあ！？ あいつと、叶野さんが！？」

「……あんた、あの子の事さん付けで呼んでんの？ ……まあいいんだけど」

あまりにも意外だったらしい。

思わず本筋じゃない所に突っ込んでしまった奈々だが、すぐに気を取り直す。

「ユイちゃん、あたしの、高校入ってからのだちなんだけどさ、何かあんだとあたしの関係に焦れて、仲を取り持とうとしたらしいのよ。それで、あんだのだちである新柴と図って、あたしらに同時に恋バナ振ったんだとさ」

「んじゃあ、あの野郎がやたらとそういう話を振ってきてたのは……」

「あの子に、頼まれたからでしょうね」

そう言われれば確かに、昨日の展開は出来過ぎていた。同じ日に、別々の人から、同じ話を訊くなんて、偶然にしては出来過ぎだった。

（あのヤロー……）

とりあえず明日まず会ったらジャーマンスープレックスからの筋肉バスターの刑だ。

心の内で決心を固めた勝也は、ふと、奈々の表情に目が行った。

奈々は門扉に背中を預け、腕組みをしながら、フツと、軽く笑ったのだ。

まるで何か、ふっ切れたみたいに。

まるで何かを、諦めようとするかのように。

「全くお節介な話よね？ ま、あたしはユイちゃんのそーいうトコが好きなんだけど。でも、あり得ない話よ。あたしが、恋なんて、

ね
」

「……俺もだよ」

「知ってる。だからあたしらは敵同士なんですよ？」

「ああ。俺達は、敵対してしか分かり合えない、最低な関係だ。それが、お望みなんだろ？」

「そうね。前からだったのかもしれないけど、今は特にそんな気分よ」

会話は止まり、二人は同時に、笑い合う。

冷たく、

シニカルに、

相手を否定するかのように、
自分を否定するかのように、

嗤って、

晒って、

笑い合う。

「……んじゃ、お前の調子も戻ったようだし、停戦は終了だ。決着付けようぜ」

「いいわ。こないだの続きね」

「いや」

ここで、勝也は、危うい笑みを見せる。
退廃的でいて、どこまでも楽しげな、笑み。
それは勝也が、何かを企んでいる顔だった。
奈々はその笑顔を見て、一瞬でそうと理解したが、しかし、その
先が読めない。

一体、“何を”企んでいるのか。

「全ての、決着。これまでの十年間、全ての戦いの、決着だ」

「えっ!？」

唐突な提案に、奈々はさすがに戸惑った。
勝也はそんな奈々を見て、さらに底意地悪く笑う。

「当然、大きな勝負だから、負けた時のデメリツトも過去最大だ。
この勝負、互いに自分の“魂”を賭けようじゃねえか」

「……は？」

話が壮大になり過ぎて、奈々はアホを見る目つきになった。
何だこいつ? いきなり中二に逆戻りかよ?
そんな、一瞬シラけかけた奈々を、勝也は続けざまにけしかける。

「まあ、お前に“魂”なんて立派なもんが、本当にあればの話だが
な」

「……は？ 何チヨーシこいてんのお前？ なめんのもいい加減にしるよ？」

魂が、無い。

誰よりも恐いもの知らずで、誰よりも“涙”とは縁遠い。

誰よりも恐さを欲し、誰よりも涙したいと願っていた。

そんな子供だった奈々に、この言葉は、残酷な程に的を得た、挑発だった。

こんな、奈々の心を抉るような台詞も、今までの闘争の中では言わなかった訳ではない。

しかし、今さら、だ。

勝也と敵対し続ける事で、怒りや憎しみといった感情から、充分に“人間の感情”を手に入れた今の奈々にそれを言うのは、最早、今までの全否定。

勝也との闘争全ての、全否定とも言えた。

奈々の声は、がぜん低くなる。

「いいわよ？ その魂っての？ 賭けてやろうじゃないの」

自信満々に言った奈々を見て、勝也はまた、シニカルな笑みを浮かべる。

「ふん、軽々しく乗ったな？ じゃ、Bコース、アリアリのルールだ。お前を敗北の地に沈めてやんよ」

「あんだこそ、その恥っずかしい条件持ち出した事を後悔さしてやるわよ」

お互い、殺意を剥き出しにしながら、何も言わず、ただ前を見る。
やがて二人は、示し合わせたかのように、同時に校門を駆け出した。

第9話

9 .

日が暮れ、空にはまばらに星が出始めた頃。

二人の勝負に、決着が着いていた。

人影も無く、もの静かな住宅街。

勝也と奈々。

互いの家を隔てる路上。

そのゴール地点に先に着いたのは、勝也の方だった。

「はあ……はあ……へへ、どうやら俺の勝ちだな」

「くっ……あ、あんた、なんつード汚い手を使うのよ！」

対する奈々は、涙目だった。

ド汚い手。

その詳細、悪質さは言葉ではとても語り尽くせない事だが、あえて表現するならば、

奈々の羞恥を効率よく刺激する戦法を終始取り続けた、というだけである。

そもそも、勝也は戦いに臨む前に、カバンの中身を全てそれ用の装備に変えていたのだ。

通常装備で望んだ奈々では、対処できるはずも無かった。

「へっ、あん時のフライングのお返しだ。んじゃ、勝利者ボーナス、

頂くぜ」

「ぐっ……!!」

あまりに理不尽な展開に、奈々は文句を言いそうになる。

しかし、“魂”を賭けるというワケの分らない条件と、何でもアリアリのルールを、認めた上で負けてしまったのだ。

文句など言える立場ではない。

「ちっ、仕方ないわね……」

舌打ちを漏らしながら、しかし奈々は困ってしまった。

“魂”を賭けるなどと言ってしまったが、具体的に一体何を渡せばいいのか。

まさか本当に、“死”を望んでいるのではなからうか。

勝也は、「決着をつけよう」と言った。

その決着の結末として、文字通り、生死を賭けるつもりだったのか？

戦争は、勝者のみが生き残る。

それは、これまで重ねてきた闘争の結末として、確かに相応しいものかもしれない。

それだけ、ガチで戦り合ってきたのだ。

しかし……

（やっぱり、死ぬのは、怖いな……）

いや、怖いというよりは、悔しい、だ。

目の前の、ふてぶてしい、デリカシーの欠片も無い、人相の悪い

男。

この幼なじみを、とうとう打ちのめせなかった。
その事が、どうしようもなく、悔しい。

でも、勝負は勝負。

敗者に、何かを語れる口など無い。

「過程はどうあれ、負けたからにはうだうだ言っつもりは無いわ。
煮るなり焼くなり好きにしま」

奈々はその場に座り込み、あぐらをかき、目を瞑った。
気分はさながら、切腹直前の武士である。
まあつまり、最悪な気分だった訳だが。

「いい覚悟だ」

声と共に、勝也の手が奈々の肩に置かれる。
思わず身体がピクリと反応してしまう。

そして、だんだん勝也の顔が近づいてくるのが分かる。
耳元で脅し文句でも言うつもりだろうか。

でも、勝也の顔は一向に進路を変えない。
耳元ではなく、額にでもぶつけるつもりか？

しかし額にもぶつからず、さらに近づく。
そして、これ以上なく近づいてきた勝也の頭は、

奈々の唇を、奪っていた。

「っーーーーー!!!!!!」

思わず目を見開いた。

途端にどアップで映し出される勝也の顔。

「っーーーーー!!!!!!」

こいつもこいつで、目を開けた奈々に戸惑ったようで、目を見開いて後ずさった。

「なっ！ なっ、なっ、なっ、なっ！！？」

「なっ！ なっ、なっ、なっ、なっ！！？」

両者共、まともに言葉も発せられない程混乱していた。しかし、特に混乱がひどかったのは、奈々の方だ。

感触は確かに残っている。

むせ返る程近づいた勝也の匂いも残っている。

しかし、目を瞑っていたせいで、どうにも現実感が湧かない。

そして目を開けたら、向こうから離してしまった。

奈々自身も、元から座り込んでいた姿勢から更に後方へ下がろうとして、腰が抜けてしまった。

立ち上がるうにも、全く力が入らない。

（え？ 何を！？ 何が！？ 何で！？）

あり得ない。

全く、予想だにしていない展開だった。

（何でっ！！？）

「っ、たく、急に目え開けんな！ 思わず離しちまっただろうが！」

先に平静を取り戻したのは、勝也の方だった。

立ちあがって、ズボンに付いた埃を乱暴に払っている。

離れたって、何を！？

目開けてなかったら、離さないつもりだったの！？

「あ、あ、あ、あんたっ！！ な、ななな何、してんのさ！？」

「何って、勝利者ボーナスだよ！ おめえのファーストキスを頂いたんだ！」

初めてだって事は分かってんだよ！

幼なじみは、そう言って勝ち誇った。

「あ、あ、あ、あんた！ あんたあんたあんた！！」

「だあーうるせえうるせえ！！ キスの一つや二つでわめくんじゃねえよ！ ガキかお前！！」

強がって、ふて腐れた顔をしていたが、勝也の顔は耳まで真っ赤だった。

奈々も、自分の顔が焼ける程熱くなっているのを感じている。

理解できない。

ワケが分からない。

何で勝也がこんな事を……

「……分かんねえか？ 俺の事が」

「っ！？」

奈々は混乱を抑える間もなくそんな言葉をかけられて、キツと勝也を睨みつける。

「俺もよ、分かんなくなっただよ。お前が」

恋だの愛だの、惚れたの腫れたの、そういうものが分からないように、

人の心は、分からない。

「キツカケはどうあれよ。俺も、あいつらにけしかけられて、色々考えちまってよ。んで、気づいた」

勝也は奈々を指差し、言った。

「俺はお前の事なら何でも知ってる。けど、やっぱり、何も分かってなかったんだ」

「……？」

何を、言っているのか、まるで分からない。

勝也は一体、何を考えているのか。

奈々がそれを知るためには、もどかしい事に、勝也の言葉を黙って聞く他なかった。

「気づいてたか？ 昨日、お前が俺におぶわれてた時、泣いてたっ

て事」

「はっ！？ マジ！？」

「で、色々、込み上げてきてな」

勝也は照れを隠すように頭を掻きむしり、言った。

「俺は、お前に泣かれて、名前で呼ばれて、ムカついた」

「……………」

「お前が、“お前みてえな奴”が、涙流すほど傷ついてたのに、俺がそれを気付けなかったのが、ムカついたんだ」

気付けなかった。

気付かなかった。

分かって、いなかった。

ずっと一緒にいて、ずっと一緒に居過ぎたが故に、緩やかな変化を認識できなかった。

お互いは変わってないと思っていても、時は進むし、人も進む。
新しい人間関係を否応なく結び、それに我知らず影響される。
そんな当然の事に、今まで気づいていなかった。

勝也は、結と話し、健二に発破をかけられて、奈々と向かい合う事に決めた。

「もうこんな気持ちにはなりたくねえ。俺はその時、確かにそう思った。それが俺の本心なんだって、気づいた」

知ろうと、思った。

涙の理由を。

奈々の事を。

何もかも知っている気安い“敵”としてではなく、時を経て変わっていった、今の奈々を見よう。

そう思った。

自分達が変わったように、

自分達の関係も、前に進めよう。

抱いた気持ちから逃げないで、正面から戦おう。
そう、思ったのだ。

「……つか、もう言うけどな！ 要するに、俺はお前に惚れたんだ
よっー！！」

夜のしじまに、勝也のこっ恥ずかしい絶叫が響いた。

閑静な住宅街の真っただ中である。

近所迷惑もはなはだしい。

それでも勝也は、告白を止めない。

「お前が好きだ！ お前は俺だけのもんだ！ 俺以外にお前を傷つけさせてたまるか！ もっと！ ずっと！ 俺の傍にいろ、奈々っ
！！」

勝也は、奈々の名を呼んだ。

恋愛だの何だのが分からないと言っていた勝也は、今、確かに、

奈々を好きだと言った。

「……………」

奈々は、未だに立てずにいた。

腰だけでなく、両手も地面に付いて、身を震わせている。

顔を俯かせているため、この薄暗い中で彼女の表情は伺い知れない。

そして奈々は、かすかな呟き声を放つ。

「……………」

「あ！？ 何か言ったか！？」

告白した直後だからか、勝也は荒い息のまま奈々に声をかけた。

恋愛の機微などまるで解さず、故に告白における順当な手順も知らない勝也は、“返事を聞く”という大事な場面を完全に忘れていたのである。

告白し終える事で、自分にはもう何も恐いものは無いと、錯覚していたのだろう。

ゆえに次の瞬間、

勝也は思い知る事になる。

今日のこの時のために勝也が抱いた覚悟など、奈々のその前では芥子粒程度のものであった事を。

「……ざけんなよ。あたしが、何年言えなかったと思ってる?」

気のないフリしやがって。

今までマジで「ありえねー」とか言ってやがって。

それがいきなり手の平返して「好きだ」だあ?

自分勝手にも程がある。

気付かなかっただあ?

あれ程そばにいたのに?

泣かれて、ムカついただあ?

あたしが、他の誰かに傷つけられたとも思っているのか?

あたしが、あんたのものじゃなかった時が、一秒でもあったと、本気で思っているのだろうか?

あれ程嫌悪して、あれ程反発して、あれ程戦って、あれ程傷つけあったのに、未だにこうして一緒にいる理由が、本当に分からないとでも言うのだろうか?

「は? お前、何言って……!?!」

瞬間。

奈々は即座に立ちあがり、不用意に近寄ってきていた勝也の襟首を掴み、強引に引き寄せていた。

再び、顔が極度に接近する。

「何を言ってるか分からないか? なら教えてやる! あたしはま

だ、あんたに“勝者ボーナス”を渡していないからな」

「はっ！？ それならさっき、俺がお前にした……」

「あんなガキみたいなキスと、あたしの“魂”がつり合うワケないでしょ！？ それこそ、ざけんなって話よ！」

いくら鈍感な勝也と言えど、ここまで言われれば流石に理解する。どうやら奈々の方も、勝也にベタ惚れだったらしい。しかも、その感情は恋愛と言うよりもはや愛憎と言ってもいい程に、奈々の中に蓄積されていたらしい。

勝也は思う。

これまで、幾度も奈々とは戦ってきたが、今日ほど、奈々に恐怖を感じた日は無い、と。

そんな勝也の表情を見て満足したのか、奈々は軽く鼻で笑って、勝也の襟首をさらに引き寄せる。

そして、ささやくように言った。

「受け取りな。あたしの“魂”、思いのたけって奴をね」

勝也は、レースでは勝ったが、奈々に預けられた“魂”の重さに、この上ない敗北感を味わった。

(畜生……可愛い過ぎる)

負けるのは、悔しい。

当たり前の事を当たり前に、勝也は感じていた。

第10話

10 .

翌日、朝。

勝也と奈々は“いつも”より早めに家を出た。

歩いて学校に通うため、そしてその途上で、結にことの顛末を報告するためである。

正確には、奈々がそうしたいがために勝也が押し切られた形である。

勝也は少し結が苦手であつたし、奈々の言いなりになるのは癪でもあつたが、しかし今の二人の関係があるのは結のおかげでもあるわけだから、それなりに筋は通さなければならぬだろう。

そんな訳で、朝の通学路である。

「おめでとつございます!」

結は開口一番、満面の笑顔で二人に言った。

「お、おう」

勝也は結のあまりにも眩しい笑顔に戸惑いながらも、一応の返事をし、

「うん。心配してくれてありがとね」

奈々は優しい声を出しながら結と「おはようのハグ」をした。この辺り、ノリが女子である。

「うんうん、やっぱりお二人はこうなる運命だったんですよ！ 両想いで、お互いの事を分かり合って、それでこうならないなんて今までがおかし過ぎたんです！ けど、やっぱりロマンチックですね！ うわぁ！」

勝也と奈々の周りをくるくる回りながら、無邪気にはしゃぐ結。ともすると当人以上に喜んでいるっぽい結を見て、勝也は気恥ずかしげに顔を俯かせ、奈々はくすくす笑いながら友人を見ていた。結はしばらく浮かれたように笑っていたが、やがてはっと二人を見る。

「あ、でもでも！ これからお二人は、もう掴み合いの喧嘩とか、そういう暴力はダメですよ？」

「えっ、マジで？」

結の発言にうろたえたのは、勝也だった。

「当たり前です！ お二人はこれから恋人同士。お付き合いをするんですよ？」

「い、いや、けどよ……、今までずっとバトってきて、そのおかげで分かり合えてた事も……」

「確かに、そういう“絆”もあると思いますし、それを否定しようとは思いません。むしろ、口ゲンカくらいだったら、いくらでもした方がいいと思います」

た・だ・し！

結は熱の籠もった声で、勝也に念を押す。

「暴力はいけません！ それに、無暗に競い合うのも違うと思います。もう二人は反発し合うのではなく、共に支え合う仲になったのですから」

「け、けどよ……」

「それに、戦いに熱中し過ぎて、ケガとか、事故とかで、取り返しのつかない事になったら、元も子も無いじゃないですか」

その言葉は、流石に反論できなかった。

一昨日の、奈々のケガの事を思い出したのだろう。

「戦いの勝ち負けや、自分のプライドよりも、大切なものを見つけただんでしょ？」

普段はおどおどして、ものをはっきり言えない結が、目に強い光を宿して二人を見つめる。

結の意外な強さを見て、勝也は結の言葉と、奈々の存在を反芻する。

「……確かに、ユイちゃんの言う通りかも。あたしらはもう少し、穏やかな関係になるべきなのかもしれない」

奈々も、自分の今までを思い返していたのだろう。

少し考え込むようにそう言った。

勝也たちは数々の問題を起こしているとはいえ、本来的には、ただの高校生なのだ。

不良グループのトップでも無ければ、レディースのドンでもない。
普通の、高校生だ。

戦う理由が無いなら、無理に戦う必要なんて無い。

「ただね、そうするには一つだけ、残ってる問題があるのよ」

「何です？」

「まだ、“決着”がついてないんだ」

奈々の発言に、（背後で密かに悶々と葛藤していた）勝也は「ああ！？」と荒々しく反応した。

「この野郎、まだ認めてねえのか！？」

「当たり前だ。あんな一方的に言い渡されて、納得できるか」

二人の緊張がいきなり高まる。

結は突然の展開にオドオドしてしまい、何も言えなくなる。

「あれは俺の負けだって、昨日から言ってたんだろうが！」

「だからそれ意味分かんないから！レースで負けたのはあたしなんだからあたしの負けに決まってるでしょ！？」

「あんなもん俺が勝つに決まってるだろ！？事前に用意してたんだから。俺は、お前の魂に負けたつつつてんだよ！」

「うつせえ！ そっち方面でだつて、あんたの方が先に告白したんだから、あんたの勝ちに決まってるでしょ！？」

「うつせえ！ そんな理由で勝ちだなんて言われたら、あん時の敗北感はどこ持ってきやいいんだよ！？」

「そんなのあたしが知る訳ないじゃない！ 男なら黙って勝ちを認めな！」

「こんな押し付けの勝利なんているか！ ドブに捨ててやるわっ！」

「……えと、何の言い争いですか？」

流石に、黙って聞けなくなってきた結は、二人の会話に控えめに割り込んだ。

勝也と奈々は、その真つ当な質問を受けて、冷静になった後、昨日の“10年分の決着”と、“魂を賭けた戦い”の詳細を結に聞かせた。

勝負には、勝也が勝った。

しかし、賭けた覚悟は、奈々の方が圧倒的に勝っていた。だから結局、どちらも明確には、自分が勝ったとは思えない。

話を聞き終わると結は、くすりと笑って、言った。

「それってまるで、“どっちがより相手を愛してるか”を言い争ってるみたいですね」

告白するために勝負を持ちかけ、それを制した勝也。勝也への思いを何年も重ね、全てを曝け出した奈々。

それぞれの“思いの形”に、優劣なんて付けられるはずがない。

「だったら、お二人の10年に渡る対決は、“引き分け”っていう事じゃないですか！」

「引き……」

「分け……」

両者とも、アホみたいにその言葉をオウム返しした。

これまでの10年間、幾度も様々な事柄で対決してきたが、引き分け（ドロー）なんて結果は、今まで一度も無かった。

「少し不服かもしれませんが、それが真実だと思います。何だかんだ言っても、勝也さんも奈々ちゃんも、お互いの事が好きだっただけなんですよ！」

断言されてしまった。

しかも、勝也と奈々も、心のどこかで納得してしまっている。

結に堂々と言われ、少し恥ずかしい気持ちになりながら、

まるで図ったかのように、

同じタイミングで、

勝也は奈々の顔をうかがい、

奈々も勝也の顔をうかがった。

「……ぷっ！」

「……くふっ！」

そして、二人は、
これまた同時に、
盛大に笑いだした。

今までの、血で血を洗うような、たった二人の間の戦争は、何のことは無い。

健二が言っていた通りのものだったのだ。

お互いの気持ちを確かめる、単なるデートに過ぎなかったのだ。

それをそうと自覚せず、マジになって、ムキになって、
そんな、つい昨日までの日々が、急におかしく思えてきたのだ。

今、こうして互いの気持ちに分かり合えた途端、あの闘争の日々が、笑い話に変わってしまった。

一体、自分達は、何と戦っていたのだろうか。

親との不和？ 心の喪失？

それが何だと言うのだ？

自分の隣には、いつも、自分と真っ向から向かい合ってくれる、
最高の幼なじみがいたではないか。

それ以上、何を望んでいたのだろうか？

二人は、笑う。

それは、腹の底から、大空に響き渡る、喜びの共鳴だった。

「あああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！」

そんな二人の世界を遮り、一人の男の、空気を読まない嬌声が、笑い声の間に割り込んできた。

何事かと三人が声の方を振り返ると、そこにはこちらを指差し、
わなわなと震えている一人の男がいた。

まあ、新柴健二だった。

「お、お前ら！？ な、何だその気持ち悪い笑い方は！ ま、まさか、お前ら……」

勝也はそんな健二の様子を見て、似合いもしない溜め息をもらす。ちらりと奈々にアイコンタクトをし、二人で隣同士に並んで健二の前に立った。

そして、お互いの肩をがっしり組んで、ピースマークを見せつけた。

健二はそれで、全てを察した。

[illegible]

祝福してくれた結に引きかえ、健二は開口一番、出てきたのは呪だった。

「おいおい、何だその言い草は。てめえでけしかけておいて」

「つか、あたしらにそんな事言うとか、いい度胸じゃないの」

「し、新柴さんっ！ い、いきなり何て事言うんですか！？ 見損ないましたっ！」

三者三様、当然の反応を受けたところで、健二はそのメンツの中に結がいた事に気づき、慌てたように言い繕った。

「あつ、いやっ、これはあれ、本心じゃなくって、いや、一応本心ではあるんだけど、そうじゃなくってね」

「じゃあ何なんですかつ！？ 私に協力してくださって、せっかくいい人だと思つてたのに！！」

しかし結の怒りは収まらない。

真面目で純粋な結には、冗談は通じない。

健二は“いい人だと思つてた”に敏感に反応し頬を染めたが、すぐに慌てたように弁明した。

「いや、ごめん！ そうじゃないんだ！ こいつらくつつけたかったのは本心なんだけど、なんてーの！？ ここは、一回言わないとスッキリしなかったと言うか、実際、そのために協力してたって言うか……」

「つか、下心見え見えだぞ。どーせ叶野さんとお近づきになるために計画に乗ったんだろ？」

「ええええ！？ え、待つてください！！ え、そんな！！」

「おいイイイイイイ！！ てめっ勝也！ 勘違いさせるような

事言っんじやねええええ！！　つか、何で計画の事バレてんの！？」

「あたしがユイちゃんから聞き出したのよ。つかあんだ、あたしのユイちゃんにそんな色目使ってたのか。歯あ食いしばるつか？」

「怖ええええええ！！　ちよっ、お前ら少しは丸くなったかと思えば全然じゃねえか！！　ちよ、ちよっとユイさんこいつら止めて下さい！！」

「し、新柴さんが私に、し、下心なんて……、い、いえ、思い上がっちゃダメよ私！　こんな妄想、新柴さんにメイワクじゃない！　そ、それにさっきのワルクチも許せないし。で、でも、あの誠意はホンモノだったし……！！」

面白半分で健二をからかう勝也。

結を守るため怒り狂う奈々。

全てに翻弄されながら逃げ惑う健二。

自分の世界に入って何故か頬を染めている結。

四人それぞれの表情と、賑やかな声が、朝の登校風景を彩る。

それは、誰もが欲しいと願い、そして、誰もが我知らず手に入れているもの、

幸せの、風景である。

いがみ合い、傷つけあった幼なじみ同士は、幾多の葛藤と闘争を経て、最後には、強引に互いを引き寄せ合い、この風景の主題になったのだ。

かくして、。高裏のツートップ恋仲説は現実となり、公認カップルは、自認カップルになった。

より強固な絆で結ばれた二人は後に“伝説の風雷夫婦”と呼ばれ、以後、後輩たちに脈々と語り継がれる事になるのだが、それはまた、別の話。

F i n
…

第10話（後書き）

という訳で、まずは、ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！

初投稿作品でございましたが、如何だったでしょうか？

この話に関する四方山話は全てブログの方で語ってしまったので、敢えてこちらでは前置き等を入れずに投稿してみました。

感想、評価、誹謗中傷、何でもいいです。

この話をここまで読んで頂いて、どんな事を思ったのか、この新米めにお教え頂ければと思います！

それでわ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506t/>

DRAW !

2011年11月11日03時57分発行